

ビブリオエッセー

産経新聞 令和2年(2020年)3月18日(水)

奈良市 川田彩乃 (20)

【着たい服がある】

忠告しておこう。この漫画は苦しい、いい意味で。

彼氏にしたい。周りの人たちにそう思わせるほど「カッコいい女」である主人公、小林マミ。ひっそりとロリータファッションを楽しむマミは周囲のそんな評価にひとり悩む。「その自分は本当の自分じゃない」。

「…てかじゃあさ」「この服脱いだら私は私じゃなくなっちゃうわけ?」「服がないと持てない自分ってホントに自分?」

服をバカにされたら自分自身をバカにされたのと一緒。そう感じていたマミはロリータファッションの先輩、カヤさんから一喝される。

「服があんたなんじゃない」「あんたが服を着るんだよ」。主人公が、いま自分が「どい」にいるのか、気づく

ロリータファッションという生き方

場面である。

服を通して広がる人間関係。その中でマミは「自分らしさ」とは何か、もがき、悩み続ける。描かれているのは、目を背け続けた「自分」に果敢に立ち向かう姿だ。

カヤさんはこう言い放つ。

「ロリータってね服とか肩書のことじゃないの」「反骨精神を持って少女趣味を貫く」「『生き方』のことなの」。

セリフのひとつひとつがどつと襲いかかってくる。読み終わるごとに自分に問いかける。「自分らしさ」とは?

自分は一体「自分」なの?

苦しくてしょうがない。

読んでみたいと思ったあなた。最後にもう一度、忠告しておく。本当に苦しい本である。そしてもう一つ。読み終えた後、きつと「着たい服」を着たくなるだろう。

常喜寝太郎(講談社)

2020.3.18

※無断転載不可